

春期福音特別集会（3）（京都）

葡萄園の歌

――イザヤ書第5章――

1983年6月5日

小池辰雄

わが葡萄園 神さまの怒り 審判と批判 霊的世界秩序 内在内住 霊・言・現 禍なるかな
キリストと一つになっている現実

【イザヤ5】

1 われわが愛する者のために歌をつくり、我があいするものの葡萄園のうたをうたわん。わが愛するものは土肥えたる山にひとつの葡萄園をもてり。
2 彼その園をすきかえし石をのぞきて嘉ぶどうをうえ、そのなかに望楼をたて酒槽をほりて嘉葡萄のむすぶを望みまてり。然るに結びたるものは野葡萄なりき。

3 さればエルサレムに住めるものとユダの人よ、請うなんじら我とわがぶどうぞのとの間をさばけ。4 わが葡萄園にわれの作たるほかの何のなすべき事ありや。我はよきぶどうの結ぶをのぞみまちしに、何なれば野葡萄をむすびしや。5 然ればわれわが葡萄園になさんとすることを汝等につげん。我はぶどうぞのの籬笆をとりさりてその食いあらさるるにまかせ、その垣をこぼちてその践みあらさるるにまかせん。6 我これを荒らしてふたたび剪ることせず耕すことをせず、棘と荊とをはえいでしめん。また雲に命せてそのうえに雨ふることなからしめん。7 それ万軍のエホバの葡萄園はイスラエルの家なり。その喜びたもうところの植物はユダの人なり。これに公平をのぞみたまいしに反りて血をながし、これに正義をのぞみ給いしにかえりて号呼あり。

8 禍なるかな、彼らは家に家をたてつらね、田圃に田圃をましくわえて余地をあまさず、己ひとり国のうちに住まんとす。9 万軍のエホバ我耳につげて宣わく、実におおくの家はあれすたれ、大いにして美しき家は人のすむことなきにいたらん。10 十段のぶどうぞの僅かに一バテをみのり、一ホメルの穀種はわずかに一エパを実るべし。11 禍いなるかな、かれらは朝つとにおきて濃酒をおいもとめ、夜のふくるまで止まりてのみ、酒にその身をやるるなり。12 かれらの酒宴には琴あり瑟あり鼓あり笛あり葡萄酒あり。されど



エホバの作為をかえりみず、その手のなしたもうところに目をとめず。

13 斯るが故にわが民は無知にして虜にせられ、その貴顕者はうえ、そのもろもろの民は渴きによりて疲れてん。14 また陰府は欲望をひろくし、その度られざる口をはる。かれらの栄華かれらの群衆かれらの饒富および喜びのしめる人みなその中におつべし。15 賤しき者はかがめられ、貴きものは卑くせられ、目をあげて高ぶる者はひくくせらるべし。16 されど万軍のエホバは公平によりてあがめられ、聖なる神は正義によりて聖とせられ給うべし。17 而して小羊おのが牧場にあるごとくに草をのみ、豊かなるものの田はあれ旅客にくらわれん。

18 禍いなるかな、彼等はいつわりを縄となして悪をひき、索にて車をひくごとく罪をひけり。19 かれらは云う、その成さんとする事をいそぎて速やかになせ、我らこれを見ん。イスラエルの聖者のさだむることを通り来たらせよ、われらこれを知らんと。20 禍いなるかな、かれらは悪をよびて善とし善をよびて悪とし、暗きをもて光とし光をもて暗しとし、苦きをもて甘しとし甘きをもて苦しとする者なり。21 わざわいなる哉、かれらは己をみて智しとし自らかえりみて聡とする者なり。22 禍いなるかな、かれらは葡萄酒をのむに丈夫なり、濃酒を和するに勇者なり。23 かれらは賄賂によりて悪きものを義となし、義人よりその義をうばう。

24 此によりて火の舌の刈株をくらうがごとく、また枯草の火焰のなかにおつるがごとく、その根はくちはてその花は塵のごとくに飛びさらん。かれらは万軍の主エホバの律法をすててイスラエルの聖者のことばを蔑したればなり。25 この故にエホバその民にむかいて怒をはなち、手をのべてかれらを撃ちたまえり。山はふるいうごき、かれらの屍は街のなかにて糞土のごとくなれり。然はあれどエホバの怒やまずして尚その手を伸ばしたもう。

26 かくて旗をたててとおき国々をまねき、彼等をよびて地の極より来らしめたまわん。視よかれら趨りて速やかにきたるべし。27 その中には疲れたおるものなく、眠りまたは寝るものなし。その腰の帯はとけず、その履の紐はきれず。28 その矢は鋭くその弓はことごとく張り、その馬のひずめは石のごとく、その車の輪は疾風のごとしと称えられん。29 その吼ゆること獅のごとく、また小獅のごとく、吼えうなりつつ獲物をつかみて掠め去れども之をすくう者なし。30 その日かれらがなりどよめくこと海のなりどよめくがごとし、もし地をのぞまば暗きと難とありて光は黒雲のなかにくらくなりたるを見ん。



●わが葡萄園

イザヤ書5章の始めの所は、イザヤの預言の大部分始めの方の預言らしい。

「われわが愛する者のために歌をつくり、我があいするものの葡萄園のうたをうたわん。わが愛するものは土肥えたる山にひとつの葡萄園をもてり。

「わが愛する者」とはエホバのことです。「葡萄園」はイスラエルです。ヘブライ語というのは主語が必ずしもはつきりしないので困る。ある時は、二重映しになっていたりする。その点ではちよつと日本語と似たようなところがあります。

² 彼その園をすきかえし石をのぞきて嘉ぶどうをうえ、そのなかに望楼をたて酒槽をほりて嘉葡萄のむすぶを望みまてり。

マタイ伝21章に有名な葡萄園の譬え話が出てくる。

「また一つの譬を聴け、ある家主、葡萄園をつくりて籬をめぐらし、中に酒槽を堀り、櫓を建て、農夫どもに貸して遠く旅立せり。……「わが子は敬うならん」と言いて、遂にその子を遣ししに……」(マタイ21・33…37)

「葡萄園の家主」とは神さまです。「わが子」というのはキリストのことです。キリストの迫害をキリストは預言して言っておられる。これは非常に深刻な譬え話です。

イスラエルでは、葡萄とかオリーブとかいちじくの木は非常に大事な木です。特に葡萄の汁は血に例えられる。葡萄は生命の方です。「膏注がれたる者」という膏はオリーブの膏です。

然るに結びたるものは野葡萄なりき。

とある。エレミヤ記2章にも出ています。

³ さればエルサレムに住めるものとユダの人よ、請うなんじら我とわがぶどうぞのとの間をさばけ。

妙なことが書いてある。

「エホバの神とイスラエルとの間を裁いてごらん。どちらが義しいか」と。

⁴ わが葡萄園にわれの作たるほかの何のなすべき事ありや。

「私は葡萄園の主として為すべきことをしたのに、葡萄そのものはどういうことになつたか。普通の因果関係ではないぞ」

というわけです。

我はよきぶどうの結ぶをのぞみまちしに、

当然、よきはずであるのに、

何なれば野葡萄をむすびしや。

というわけです。これは、

「原因にそわない結果になってしまったではないか。わが子を養ったのに、背いた」ということの内容を、今度は葡萄園に例えて仰っているわけです。



●神さまの怒り

5 然ればわれわが葡萄園になさんとするを汝等につげん。我はぶどうぞのの籬^{まがき}笆をとりさりてその食いあらさるるにまかせ、その垣^{かき}をこぼちてその^ふ践みあらさるるにまかせん。

神さまの怒りがかかってきた。

「それでは、悪いやつにやつつけさせるぞ」

と。これはアッシリヤとバビロニアにイスラエルとユダがやつつけられる、その預言になるわけです。別にアッシリヤやバビロニアがよいのではない。神さまは、そういう力ある者を使つて審判をなしたもう。

日本が間違つた戦争を起こして、やつつけられた。藤井武先生が「天剣」と言われた。天の痛み戒めです。内村鑑三先生も、日露戦争の始まる前、明治36年に、

「日本はこんなことをしていると、今に滅びるぞ」

と、滅びの預言をしています。藤井先生も、

「日本よ、滅びよ」

という逆説的な詩を書いた。どれも愛すればこそその怒りの言葉です。

神の怒りというのは、パウロも言っているけれども、神の愛の別な現れ方を神の怒りという。これは審判^{さばき}の義です。義の審判です。神さまは審き放しではない、怒りつぱなしではない。教育にもそういう面がある。甘やかしていたらダメです。

「聞こつとしないならば、感じなければならぬ」

というドイツ語のことわざがある。「感じなければ」とは「ひっぱたかれて痛さを感じなければ」ということです。

神さまの言うことを素直に聞かず、恵みを素直に受けないから、それで、野葡萄になつてしまった。甘いはずのものがすっぱくなつてしまったと。

6 我これを荒らしてふたたび^か剪ることをせず耕すことをせず、棘^{おどろ}と荊^{いばら}とをはえいでしめん。また雲に命^{おほ}せてそのうえに雨ふることなからしめん。7 それ万軍のエホバの葡萄園はイスラエルの家なり。その喜^うびたもうところの植物^{うえもの}はユダの人なり。これに公平をのぞみたまいに^{かえ}反りて血をながし、これに正義をのぞみ給いしにかえりて号呼^{さけび}あり。

ここにも「公平」と「正義」と書いてある。この言葉はしばしば出てくる。これはイザヤ書の特色です。

●審判と批判

義^{ただ}しいものを義しいと判断し、間違つたものを間違つたと判断する。これが本当の批判精神です。審判と批判です。批評ではない。批判、「クリティーク」です。カントが三批判



書を書いた。カントの哲学は批判哲学です。批判というのは、真理に即せんとして、真理を規準にしてもものをみることです。正しい知、自然科学的認識。正しい意志、道德の世界。正しい判断力、情、芸術の世界。知情意ということ。ゲーテもカントの最後の『芸術論』には驚いて非常に愛読した。カントというのは不思議な哲人です。

とにかく、みな打ち込む魂です。打ち込みが大事です。信仰の世界も正に打ち込みです。全存在的な打ち込み、それが帰り入ることです。瞬間に全生命をかける。これはゲーテの言葉です。

「博打^{ばくち}うちは生命賭けの博打をつつ。自分もそのように瞬間に対して生命賭けだ」

と。ダンテが本屋に寄って店先で本を読んでいた。王様の行列が通っても、それを知らなかったという。それくらい、みな打ち込む。

環境がどうのこうのと、環境を騒いでいるうちはダメです。肉の耳に聞こえようが、そんなものは聞こえないというような境地に入る。柔軟性をもたないとね。運命環境をいつも苦にしているようでは、いつまでたつても始まらない。

「雲が今日は晴れた。また雨だ」

なんて、しょっちゅう天気予報ばかり気にしているようなのはダメなんだ。

「天気予報なんかどうでもいい、雲が晴れようが晴れまいがどうでもいい、マイペースで行くんだ」

と言って、やっていくことです。今は情報過剰で、やかましくてしょうがない。情報過剰の神経衰弱になる。

クリティック、批判精神ということ。真理に即せんとしてやっていく。批判というのは、自己を主張するのではない。真理を規準としていく。本当の批判精神は自分がない。無私なんです。人のことを何のかんのと主観的に批評するのはダメです。だから、本当の批判精神は、自分が間違っていれば、

「自分が間違っていた」

と男らしくすぐ兜を脱ぐ。屁理屈でもつてごまかさない。それが本当の審判(ミシュパート)なんです。審判と批判というのはそういうわけです。規準は神・キリストという真理が規準です。キリストは父の御意が規準だ。ルターの奴隷意志論です。奴隷意志になると本当の批判がでてくる。

それが「公平を望み」ということ、本当の審判を望むことです。

「審判を喜ぶようにならないければダメだ」

とルターも言っている。神さまの審判を喜ぶところに、その時に必ずそこには恩恵がやってくる。殺されつつ生きていくんです。

「人間は常に新たに自己をのりこえていくものである」

と、キルケゴールもニーチェもそういうようなことを言っている。本当のプロテスタント



精神というのは、自己自身にプロテストしていく。マルチン・ルターは忠実なるカトリック教徒です。別にカトリックから出ようと思っただけではない。ところが、カトリックとしての我を批判していると、その時のカトリック全体に対して「ナイン(否)」ということになった。それは、カトリックの中の自分に対する自己批判がそういうことになっていく。おもしろいね。

神さまに叱られなければ、見捨てられたら、もうお終いです。顧みられなくなったらお終い。顧みられて、怒られているときはまだいい。まだ望みがある。審判を受けなくなったらお終いなんです。ダンテの『神曲』に、

「天国もこれを受けず、地獄もまたこれを受けないやつらがある。これは良くもなく悪くもないという中間者流だ。わけの分からない連中は地獄の外に出されている。地獄も受けとらない。そういういい加減な人間がいかに多いか」と、おもしろいことを言っている。

7……これに公平をのぞみたまいに反りて血をながし、これに正義をのぞみ給いしにかえりて号呼あり。

抑圧されて、弾圧に対する叫びがある。

イスラエルの民ばかりでなくて、我々は霊のイスラエルです。霊のイスラエルであるはずのキリスト教界が今はどうも、ここに書いてあるような葡萄園になってしまっている。今、ステパノが現れたら、キリスト教界にむかって、

「汝らは聖霊に逆らう。聖霊を受けてないではないかとやられる。」

私は1923年3月23日に信仰に入りました。記念に聖書を持って写真をとった。1950年の秋に聖霊のバプテスマを受けた。それではつきり次元的に変わった。

「聖霊を受けたから聖人になった」

なんて言っているのではない。

「聖霊を受けて、事実、キリストが働き出しつつありたもう」

ということ。問題は私ではない。キリストが働いていらつしやるその事態です。相対的人間小池を見たら躓きますよ、その奥の絶対的な何ものかを見てももらわないと。無の世界はありがたい。

●霊的世界秩序

ヨハネ伝15章とイザヤ書5章は相照応するところです。マタイ伝21章のキリストの譬話に、

「³³また一つの譬を聴け、ある家主、葡萄園をつくりて籬をめぐらし、中に酒槽を堀り、櫓を建て、農夫どもに貸して遠く旅立ちせり。³⁴果期ちかづき



たれば、その果を受けとらんとて僕らを農夫どもの許に遣ししに、³⁵農夫どもその僕らを執えて一人を打ちたたき、一人をころし、一人を石にて撃てり。³⁶復ほかの僕らを前よりも多く遣ししに、此をも同じように遇えり。³⁷「わが子は敬うならん」と言いて、遂にその子を遣ししに、³⁸農夫ども此の子を見て互いに言う「これは世嗣なり、いざ殺して、その嗣業を取らん。」この「子」というのはキリストご自身のことです。

³⁸斯て之をとらえ葡萄園の外に逐い出して殺せり。
エルサレムの外、ゴルゴタだ。

⁴⁰さらば葡萄園の主人きたる時、
神さまが来たときに、

この農夫どもに何を為さんか』

彼らは預言者たちも殺したからね。「農夫ども」というのはイスラエルのけしからん連中だ。

⁴¹かれら言う『その悪人どもを飽くまで滅ぼし、⁴²果期におよびて果を納むる他の農夫どもに葡萄園を貸し与うべし』⁴²イエス言いたもう『聖書に、⁴³造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる、これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり』とあるを汝ら未だ読まぬか。⁴³この故に汝らに告ぐ、汝らは神の国をとられ、其の果を結ぶ国人は、之を与えらるべし。本当の果を結ぶ者に、異邦人に移ってしまうぞと。

⁴⁴この石の上に倒るる者はくだけ、又この石、人のうえに倒るれば、其の人を微塵とせん』

躓きの石、キリストです。

⁴⁵祭司長・パリサイ人ら、イエスの譬をきき、己らを指して語り給えるを悟り、⁴⁶イエスを執えんと思えど群衆を恐れたり、群衆かれを預言者とするに因る。」
(マタイ21・33〜46)

この群衆もやがてみなダメになってしまう。葡萄園の家主は神さまで、その子はキリストというわけです。せつかくの葡萄園もだいなしなことになってしまつて、異邦人にわたる。「イスラエルの選びの民、祭司ども、いつわりの預言者はダメではないか。その神に造られたところの葡萄園の葡萄の木がすつぱい」

と。歴史的には、そのように、イスラエルは惨憺たる歴史です。しかし、この惨憺たる歴史は、惨憺たる人類の歴史をまた代表しているのだから、困つたものだ。

霊的世界秩序がある。現実がどんなに不条理にみえようと、神の最後の審判は必ずくる。大丈夫です。血の叫びは天上の讃歌となる。私は凄惨な天国篇を書きますからね、ダンテも書かなかつたようなものを。それを書き終わるまでは死ぬわけにいかん…(異言)…。そういうおごそかな神の歴史です。



●内在内住

ヨハネ伝15章に、

「我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。」

とある。特にギリシヤ語の

「メノー」

という言葉が大事です。キリストの

「中に宿りとどまる」

こと。キリストを宿とする。

「我に居れ、居れ」

と書いてある。この「居れ」というのが

「メネイン」

というギリシヤ語です。ヘブライ語なら「ヤーシヤブ」です。

「²おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。」

「我にありて」の「にある」が「メネイン」という字です。その中に坐りこんでいることです。だからもう、「信仰」なんていう言葉は使わないでください。その中に内在内住することです。

「私は信仰は知りません、内在内住しか知りません」

というようなクリスチャンになってください。キリストと、一つということ。

私の肉体は空気の中に内在してます。空気はまた私の中に内住してます。あなた方はみなそうです。空気を吸い込んで、そして血は浄められている。肉体に一番大事なものは空気です。魂に一番大事なものは霊気です。霊気の中に呼吸しているような魂にならないとね。呼吸をとめて、グーッと霊気を吸うような境地もある。しかし、呼吸をしながら、同時に霊気を吸っている。それを

「キリストの中にある」

という。これは霊的な神秘の世界だから、仕方がない。預言者やパウロの世界は大変な現実ですから、呑気な顔して聖書は読めない。

沈黙の祈りであろうと、小川のささやきのような祈りであろうと、爆発的な祈りであろうと、嵐のような祈りであろうと、何でもござれです。その中に自分がスーッと溶け込んで入るような魂になってください。それが本当の

「無の境地」

なんです。嵐をみれば嵐となり、微風をみれば微風となる。花を見れば花となり、木を見れば木となる。みな一つになる。本当ですよ、これは。

ゲートという人はそういう人なんです。だから、それを

「対象的認識」(デーゲンシュテントリッヒェス・デンケン)



という。対象と、一如の世界でもつてもものを見ている。それは対象に捕らわれていることではない。

本当のものにはバースと感ずるような魂にならなければダメですよ、先入観でもものを見たら。悪いやつでも、そこに良いものが光っていれば、その光っているものを見る。良いやつでも、悪いものの影があれば、その影が見える。人間はドラマティックな構造だからけれども、だんだんそれが浄化されていくし、円現していくわけです。それでも、キリストの光がうれしくてしょうがない。

「葡萄の樹に連なっている、我に居れ、宿れ」

ということ。「ここに本がある」ということよりも、

「私はキリストの中にあるということの方がもつとはつきりした現実である」

ということがはつきり言えるようにならなければダメです。

キリストの言葉が時々つまずかせる。

「信仰うすきものよ」

なんて仰るものだから、

「それでは信仰を厚くしなければ」

なんて思う。そんなことは思わなくていい。

「信なき我をあわれみたまえ。あなたの憐れみだけです」

ということですよ。

●霊・言・現

「³汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。⁴我に居れ、さらば我なんじらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。⁵我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。

これらはつきりしている。

「私を離れたら何もできない。逆に、私についていけば何でもできる」

ということですよ。

「お前に与えられているものなら何でもできるぞ」

ということ。

⁶人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。⁷汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望みに随いて求めよ、然らば成らん。

「必ず成るぞ」という。キリストのこの言葉の中に、現実の中に入っていくと、これは本当



に素晴らしい。キリストは活きた葡萄の樹ですから。それに連なれば花が咲き果が実らざるを得ない。キリストの生命が――「聖餐」というけれども、聖餐を受けなかった――聖餐的なキリストの血が流れてくるから。

8 なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。9 父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。」(ヨハネ15・1～9)

「愛なる我に居れ。人を愛せざるを得なくなるぞ」

ということです。みな天的必然がはたらく。「しよう、しない」ではない。

「せざるを得ない」

世界です。そうなってきたら、力がきて楽しくてしょうがない。

これが、本当の葡萄園の葡萄の樹はそうであるはずなのに、

「私から離れてしまったから、我に居らないから、お前たちはすっぱい葡萄になつてしまった。そんなものは切つて棄てて焼いてしまうぞ」

というわけです。

「人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。」

と、ちゃんとキリストも仰つてゐる。そうなつたら、クリスチャンが一番だめだぞ。いい加減なクリスチャンよりか、「キリスト」の「キ」の字も知らないような、真心で生きている人の方がよほどいい。天国には誰が入っていくか知らんですよ。これは神さまだけが知っておられる。

「汝知りたもう」

という世界です。「さあ困つた」なんて心配しなくていいですよ、本当に十字架を受けとつていれば。

「たとえ地獄に落ちてても」

と親鸞が言つた。ヨブ記にも書いてある。そういう魂は必ず神さまはつかんで地獄からも引き上げてしまう。心配と疑いはご無用です。

● 禍なるかな

イザヤ書5章にもどります。

8 禍わざわいなるかな、彼らは家に家をたてつらね、田圃たはたに田圃をましくわえて余地をあまさず、己ひとり国のうちに住まんとす。

そういつた大地主みたいなやつらのことです。

日本は困つたものだ。土地ばかりは国有にしたらいいと私も思う。土地成り金がたくさんいて、値上げしてしまつて、日本みたいな住宅難の国はないではないですか。それが民



主義だという。日本という国は正直、でたらめな国だ。道德的靈的世界秩序は絶対に乱されません。みな審かれています。審かれないようだが審かれています。

9 万軍のエホバ我耳につけて宣^{のたま}わく、実^げにおおくの家はあれすたれ、大いに
して美しき家は人のすむことなきにいたらん。10 十段のぶどうその僅^{わず}かに一
バテをみのり、一ホメルの穀種^{たね}はわずかに一エパを実るべし。11 禍^{わざ}いなるかな、
かれらは朝つとにおきて濃酒^{こさけ}をおいもとめ、夜のふくるまで止^{とど}まりてのみ、
酒にその身をやかるるなり。

こういう間違った在り方ばかりだと。

「禍^{わざ}いなるかな」

という字はヘブライ語では

「ホーイ」

という。

12 かれらの酒宴には琴あり瑟^{しつ}あり鼓^{つづみ}あり笛あり葡萄酒あり。されどエホバの
作^{みわざ}為^{わざ}をかえりみず、その手^{みて}のなしたもうところに目をとめず。

とんでもないはなしだと。

13 斯^{しか}るが故にわが民は無知にして虜^{とりこ}にせられ、その貴^{とうと}顕^{きん}者^{もの}はうえ、そのも
ろもろの民は渴^{かわ}きにによりて疲^{つか}れはてん。

14 節のあたまにも「禍^{わざ}いなるかな」という言葉があつたはずだと学者が言うが、おそらく
そうでしょう。

14 また陰^{よみ}府^{のぞみ}は欲^ほ望^{ぼう}をひろくし、その度^{はか}られざる口をはる。かれらの榮華^{えいけ}かれ
らの群衆^{ぐんしゆ}かれらの饒^{にぎわい}富^ふおよび喜^{よろこ}びたのしめる人みなその中におつべし。15 賤^{いや}
しき者はかがめられ、貴^ひきものは卑^{ひく}くせられ、目をあげて高^{たか}ぶる者はひくく
せらるべし。16 されど万軍のエホバは公平によりてあがめられ、聖なる神は
正義によりて聖とせられ給^{たま}うべし。

ここにも「公平と正義」と出てくる。審判と義です。キリストの主の祈りの

「御^{あが}名の崇^{あが}められんことを」

というのも、

「御^{あが}名の聖とされんことを」

ということです。「聖とする」ということが「崇^{あが}める」ということです。

「審判は恵みのちがつた現れで、義は、神さまの怒りは、愛の別な表現である」
これはルターの言葉です。

17 而^{また}して小羊^{こやぎ}おのが牧場^{まき}にあるごとくに草をはみ、豊かなるものの田はあれ
て旅客^{たびと}にくらわれん。

18 禍^{わざ}いなるかな、彼等はいつわりを縄となして惡をひき、索^{つな}にて車をひく



ごとく罪をひけり。

おもしろい言い方をしているね、どうしてこんな言葉が出てくるかと思う。預言者というのは具体的なものを見ながら、それを表現していく。非常に詩人ですね。もともとこれはみな詩ですけれども。

「詩こそ現実である」

とはノバリスの言葉です。

「詩は人類の母語なり」

という。これはハーマンの言葉です。

19 かれらは云う、その成さんとする事をいそぎて速やかにせ、我らこれを見ん。イスラエルの聖者のさだむることを廻り来たらせよ、われらこれを知らんと。

彼等は罵って生意気なことを言っている。ここに「イスラエルの聖者」という言葉がでてくる。

20 禍いなるかな、かれらは悪をよびて善とし善をよびて悪とし、暗きをもて光とし光をもて暗しとし、苦きをもて甘しとし甘きをもて苦しとする者なり。

みな価値判断の転倒をやっている。これが「禍いなるかな」の五番目です。キリストがマタイ伝23章で七つの「禍いなるかな」を言つてらっしゃるが、ここでも七つあるわけです。

21 わざわいなる哉、かれらは己をみて智しとし自らかえりみて聡とする者なり。

実はその反対だというわけだ。これはみな支配階級の、いわゆる政治家たちです。

22 節が七番目です。

22 禍いなるかな、かれらは葡萄酒をのむに丈夫なり、濃酒を和するに勇者なり。

酒に酔っぱらっているだけだと。

23 かれらは賄賂によりて悪きものを義となし、義人よりその義をうばう。

「義人よりその義をうばう」

とは強い言葉だ。ヘブライ語では「除け者にする」と書いてある。

「義人からその義を除け者にして、うっちゃってしまふ」と。

●キリストと一つになっている現実

24 此によりて火の舌の刈株をくらうがごとく、また枯草の火焰のなかにおつるがごとく、その根はくちはてその花は塵のごとくに飛びさらん。かれらは万軍の主エホバの律法をすててイスラエルの聖者のことばを蔑したればなり。



こういうのが一番決定的な言葉です。禍害の原因は何かというと、

「万軍の主エホバの律法を――律法は聖なるものにして本当は活かすものである――

――それをすててイスラエルの聖者の御言をないがしろにしたからである」

と。それだから、その結果、

「禍いなるかな、禍いなるかな」

といって、七つのいろいろな諸々の社会的な悪が出てくる。原因を問わないで、ただ枝葉を言っただけでしょうがない。要するに、立ち帰ることだけが一番大事なことです。背くこと、離れることが不信ですから。

「信じ入る(信入)、帰り入る(帰入)、祈り入る(祈入)」

ことです。これが

「汝、われに居れ」

という内、在、内、住の世界です。これは一、如の世界です。ありがたくてしょうがない。もうそこに入ったら、何がどうなったって大丈夫です。キリストと一つになっている現実くらい強いものはないですから、我々の信仰のアルファにしてオメガなるものです。

「神―自然―我」が融合していたのがゲートという魂であった。ルターも、

「本当に神の言と一つになって、魂は神の言でちょうど鉄が火に燃やされるがごとく赤

く燃えてしまった」

と言っている。彼は霊言としてちゃんと掴んでいるけれども、プロテスタントがただ

「御言、御言」

なんて言って、

「この意味はどうだこうだ」

と言葉の解釈ばかりやっている。意味ではない。言葉の本当の響き、内実を受けとっていることです。ジーツとその中に読み入れれば、自ずからそれが分かってくる。

葡萄園はイスラエル、私たち霊的なイスラエルであるはずのキリスト教界です。その一人ひとりが葡萄の樹で、それがみな酸っぱい果を実るようなことになったのは、キリストを本当に生きていないから、ただ「信仰、信仰」と上の空で言っているだけだから、「聖書の研究」といって、ただ頭の研究ばかりやっているからです。ただギリシヤ語やヘブライ語を知ったってどうにもならん。いいですね、皆さんはもう、

「わが思い定まれり」

というわけです。本当の結論がでると、そこから本当のことが始まる。

「オメガはまたアルファなり」

ということです。

